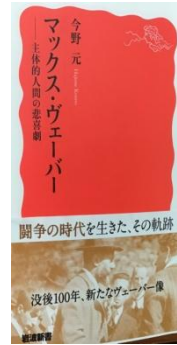


『マックス・ヴェーバー』を読む

写真は今野元著の岩波新書新刊。表紙カバー裏から『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をはじめ、今も読み継がれる名著を数多く残した知の巨人マックス・ヴェーバー(1864—1920)。その作品たちはどのようにして生み出されてきたのか。百花繚乱たるヴェーバー研究に新たな地平を拓く「伝記論的転回」をふまえた、決定版となる評伝がここに誕生。



マックス・ヴェーバーの本は、大学時代から「必読の書」として、難解ではあったが、何回も読んできた。あまり理解できなかったが。本書を読み、知の巨人としてのヴェーバー像が変わった。ドイツ政治に少なからぬ影響をあたえた「政治家」としてのヴェーバーについて、本書から多くの示唆を受けたので、抜粋して紹介したい。

ヴェーバーこそ、国民社会主義（いわゆる「ナチズム」）で最高潮を迎えるドイツ・ナショナリズム史の一里塚であり、21世紀の「闘争」状況とも通じる人物である。本書は、このマックス・ヴェーバーの「人格形成物語」を描く試みである。その狙いは、個別作品の鑑賞ではなく、それを生み出した文脈、つまりヴェーバーの生涯およびそれを取り巻く歴史的な文脈の解明にある。こうした手法的転換を、本書では「伝記論的転回」と呼んでいる。

本書は次の章から構成されている。

第1章 主体的人間への成長 1864-1892年

第2章 社会的ダーウィニズムへの傾倒 1892-1904年

第3章 ドイツ社会への苛立ち 1904-1914年

第4章 ドイツの名誉のための闘い 1914-1920年

終章 マックス・ヴェーバーとアドルフ・ヒトラー

伝記論的転回により、私は人間の「主体性」の追求こそ、ヴェーバーの人生を貫くテーマだったとの結論に達した。ヴェーバーの主体性を語るならば、彼の傑出した文章構成力、難題を次々となす集中力、自分が見込んだ弱者に示す義侠心、尽きることのない好奇心、学界・大学運営への熱心な提言、官僚精神への抵抗を描くと同時に、彼の際限ない辛辣な他者攻撃、自分および自分側（プロテスタンティズム・ドイツ・西洋など）中心の状況認識、読み手への配慮を欠く悪筆・長大な段落・難解な文体、社会的ダーウィニズムへの傾倒、カリスマ的政治指導の夢想、自分の説いた道徳を貫徹せず自縛自縛・言行不一致に陥る様をも語らねばなるまい。

副題を「主体的人間の悲喜劇」としたのは、もはや「主体的英雄の偉業」に喝采する研究状況でもあるまいとの思いからである。

とりわけ本書の終章に注目した。マックス・ヴェーバーとアドルフ・ヒトラーの共通

点、相違点が8つの論点にまとめてある。なかでも共通点が示唆に富む。

1. 二人はともに政治の本質を「闘争」と見て、そこから目を背けることを甘えとして退けた。
2. 二人はともに、ドイツ人、ドイツ国民というものを守るべき主体だと考え、人々がその維持・発展に観照的態度を決め込むことを戒めた。
3. 国家を担う強靱な個人への期待である。
4. 新興の労働者層にドイツ国民国家の将来的基盤を見た点である。
5. カトリック勢力への批判的姿勢である。
6. 西欧に世界の文化的中心を見て、ドイツは西欧とともにあると考えていた点である。
7. 統一主義を基本方針とした点である。
8. 前衛芸術に対する態度である。

ちなみに二人の共通部分の背景にある共通基盤とは何なのか—それはやはり主体性の希求を通じた「闘争」の志向だろう。従来は、主体性（近代的自我）とは抑圧と侵略とに抗する砦であり、その涵養が戦後（＝第2次世界大戦後）日独の政治課題である、ヴェーバーはその生ける模範であり、思想的導き手であるというのが通説だった。けれどもそれは、戦後という特定の権力状況を前提として政治を理解したものである。

主体的人間は他者との対決を厭わず、また自分が帰属意識を有する集団にも主体性を求めることがあって、それが行き着けば排除にも戦争にもなる。

(2020年6月29日)